

「ウェルビーイングな都市」を目指して
 — 有識者が贈る言葉 —

当所では、2019年12月に創立140周年を迎えたことを記念し、10年後の2030年に向けた「まちづくり提言」を作成しました。とりまとめにあたっては、当所がまちづくりについて長年提言してきた内容や経緯を踏まえつつ、各界、各世代の声に耳を傾けてきました。この誌面では、岡山が「日本一住みたいまち」になることを願う有識者の声をご紹介します。



宮脇 靖典氏

みやわき、やすのり
 岡山理科大学 経営学部・大学院マネジメント研究科 教授
 修士(経営学、東京都立大学)、東京都立大学大学院経営学
 研究科博士後期課程在学中、専門は、価値共創マーケティング、
 コミュニケーションデザイン。1983年に東京大学法
 学部を卒業し、株式会社電通に入社。ビジネス、ディベロ
 プメント、センター長、ビジネス統括局長、経済同友会
 出向などを歴任。事業構想大学院大学客員教授などを経て、
 2019年より現職。地域社会イノベーションなどのさまざまな
 関わり合いについて研究している岡山経済同友会委員。

誰にとつての未来を描くまちづくりなのか

企業は誰のものかという議論がある。法的には企業の所有者が株主であるものの、誰のために企業が存在するの
 かという議論になると、株主にとどま
 らず、顧客や従業員、あるいは他の利
 害関係者も視野に入れる必要が出てく
 る。地域について同じ議論をするなら
 ば、企業の場合にまして複雑な話にな
 るだろう。

地域の課題解決において近年注目を
 集めるのが、デザイン思考である。その
 特徴の1つとして、解決の出口を探る
 ことにまして問題設定の見直しを重視
 する点が挙げられる。その特徴が功を
 奏した代表的な事例が、若者による犯

罪の多発に悩んでいたシドニーの歓楽
 街である。治安の問題として捉えられ
 がちなところを、歓楽街に若者の居場
 所がないことが彼らのフラストレーショ
 ンをためる原因であると、まず問題設
 定が見直された。そして、音楽フェス
 ティバルの運営が歓楽街に導入された結
 果、治安の改善はいまでもなく歓楽
 街に新たな価値が加わるという予想以
 上の成果が得られることになった。

岡山商工会議所による昨年3月の
 提言が2030年に向けたものであつ
 たように、まちづくりの議論は、未来
 に焦点を当てる。問題は、誰にとつての
 未来を描くのかということだ。別の表

「大学生世代にとって住みたいかと思える岡山市の未来創造拠点」の提案
【A.C.T.ベース岡山】
 A.C.T. = A (ambition=野望) C.T. (come true=叶う)

- ・昼は「A.C.T.ベース岡山」で
 気軽な起業の相談や交流を、ヘルシーランチを摂りながら、ついで
 にセルフコントロールチェックも。
- ・夜は「A.C.T.ベース岡山」協賛店舗で
 起業の経験者を囲んでの懇話会を、美味しいお酒と食事と一緒に。
- ・運営は、大学生中心の任意団体で
 岡山市あるいは岡山商工会議所の支援が必要だと考えている。

岡山理科大学がPBL(課題解決型
 学習)を実施している「イノベーション・ラボ」では、昨年度、当所のま
 ちづくり提言書も素材として、「大
 学生が住み続けたいと思える岡山市の
 未来創造拠点づくり」をテーマに研
 究を重ねた。

学生の
 研究発表動画は
 こちらから

現をとるなら、誰のためにまちが存在
 するのかについて議論されているかとい
 うことでもある。とりわけ、未来を引
 き受ける当事者となる若者には、まち
 づくりについて発言する機会をもつと
 用意すべきでないかと考える。

私が大学で担当するゼミでは、「おか
 やまの未来について大学生世代の声を
 かたちにしていく」を今年の活動テーマ
 とし、岡山商工会議所の提言書などを
 教材としつつ、学生たちがまちづくりに
 ついての議論にこの1年を費やす。大学
 生世代の目で問題設定を見直すと、お
 かやまの未来は、どのように描かれる
 ことになるのだろうか。

当所では、これからの10年、おかやまが心身ともに健康で豊かさと幸せを実感できる、ウェルビーイングな都市となることを目指し、
 充実したICTデジタルインフラの整備や、緑化とカーボンニュートラルにつ
 ながるグリーンインフラの整備によって、ハイブリッドタウン岡山を創造し
 ていきたいと考えています。本提言は、当所ホームページに「本編」「資
 料編」として全文掲載しております。ぜひご覧ください。

